

# 社会科学研究所 公開研究会等の記録

<2021年度>

公開研究会	
日時	2022年3月14日(月) 15:00~18:00
開催形式	オンライン会議システム(Webex)
テーマ	1.文化と国際法—文化財破壊をめぐる国際刑事裁判における文化的考慮— 2.表現の自由とポリティカル・コレクネス:文化と自由論のねじれ
報告者	1.高崎 理子 客員研究員(中央大学経済学部兼任講師) 2.志田 陽子 氏(武蔵野美術大学教養文化・学芸員課程教授)
概要	【高崎】 文化的な要素を含む主張や証拠は、国際法廷における法的議論の俎上に載せることが、どこまで可能なのだろうか。本報告では、旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所と国際刑事裁判所の文化財破壊事例に関し、そこで行われた文化的考慮について分析し、「国際法は、文化にどこまで近づけることができるか」という点について考察する。 【志田】 ここ数年、「表現の自由」をめぐる社会的イシューが注目を集めている。その中には「批判の自由」「文化領域の自律性」として尊重されるべきものと、法的に擁護できない「言論空間からの排除」が混在している。本報告では文化的多様性に委ねるべき事柄、法が介入すべき事柄、その中間領域にある「ポリティカル・コレクネス」について思考の整理を試みたい。
主催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析:学際的挑戦」チーム(幹事:石山 文彦 研究員)

公開研究会	
日時	2021年9月18日(土)15:00~18:00
開催形式	オンライン会議システム(Webex)
テーマ	1.近代フランスにおける文化遺産とライシテ—ソレム修道院の復興とカトリック文化 2.新型コロナウイルス感染症対策に現れた法文化の憲法学的考察
報告者	1.泉 美知子 研究員(中央大学文学部准教授) 2.横大道 聡 氏(慶應義塾大学法務研究科教授)
概要	【泉】 本発表では、19世紀から第一次世界大戦までのフランスにおける宗教的遺産の保護について、共和国の理念である「ライシテ」を通して考える。発表は2部構成とし、前半では、19世紀フランスの文化財保護制度がコンコルダート体制下にある宗教政策や1905年政教分離法とどのように関わっているのかについて概観する。後半では、ソレム修道院を取り上げ、文化財保護と中世典礼の復興を紹介し、最後に、カトリックによって生み出された遺産を、共和国がいかにかに継承したのかについて議論を深める。 【横大道】 日本の新型コロナウイルス感染症対策には、日本的な法文化が反映されたものが少なくない。本報告では、それら新型コロナウイルス感染症対策の提起する憲法問題の所在を明らかにするとともに、それに関する言説も含めて、憲法の観点からの分析を試み、憲法に関する日本文化のあり様とその課題を明らかにする。
主催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析:学際的挑戦」チーム(幹事:石山 文彦 研究員)

公開研究会	
日時	2021年8月3日(火)13:00~16:00
開催形式	オンライン会議システム(Webex)
テーマ	1.インターナショナル・リーガル・デザイン—国際法をデザインする— 2.『法と文学』研究は法学と人文学にいかなる橋を架けるのか
報告者	1.小寺 智史 客員研究員(西南学院大学法学部教授) 2.小林 史明 氏(明治大学法学部専任講師)
概要	【小寺】 本報告は、「法とデザイン(Law and Design)」や「リーガル・デザイン(legal design)」の国際法への適用可能性を検討するものである。近年、デザイナーの思考様式=デザイン思考(design thinking)を様々な分野に応用する試みがなされている。この点、法学の分野においても、スタンフォード大学のd.schoolなどにおいて議論が展開されている。この報告では、デザイン思考とは何かを確認したうえで、「法とデザイン」「リーガル・デザイン」の試みを概観する。そのうえで、それら試みの国際法(学)への適用可能性を検討する。 【小林】 20世紀アメリカにおいて誕生した「法と文学Law & Literature」研究はいついかなる法に文学を持ち込もうとしたのか。その目論見と成否について概観したうえで、改めて現代的意義を検討したい。本報告は孤島になろうとしたはずの法学がこれまで人文学に架けてきた橋と、現在工事中の橋とともに点検する試みである。
主催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析:学際的挑戦」チーム(幹事:石山 文彦 研究員)